

福祉のひろば

特集 福祉の現場で長年^わけ
働きつづけられた理由



住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

2015年1月10日発刊!

福祉のひろば
ブックレット①



社会福祉基礎講座 福祉のいまが見える、わかる!

本体500円+税

- | | |
|----------------------|-------|
| オープニング | 石倉 康次 |
| 第1講 そもそも社会福祉とは何か? | |
| 第2講 最低生活水準とナショナルミニマム | 浜岡 政好 |
| 第3講 社会保障の財源がないってほんと? | 金澤 誠一 |
| | 唐鎌 直義 |

発行●福祉のひろば (書店ではご購入いただけません)

インターネットで「福祉のひろばオンライン」⇒「書籍」を検索してください。

お支払いは便利なカード決済で。▶お問合せ先 TEL・FAX06-6779-4955

南西沖地震語り部

せいのおくお
制野征夫さん

一九九三年七月二日午後一〇時一七分。北海道南西沖地震が発生しました。地震から三分後に奥尻島に巨大津波が押し寄せます。北海道沿岸にあたり、はね返ってきた津波にもおそわれます。「奥尻の復興を考える会」を結成し、全国から寄せられた一九〇億円強の義援金を生活再建・まち再建に生かそうと、願いや要望を集めました。地震による火災では、火災保険から保険金が出ないことに対して訴訟でたたかいました。奥尻観光協会会長、奥尻町議会議員八期目。

憶えていてください

麻生 直子

憶えていてください

青い潮風の海辺の町で

すこやかな心とからだをもった人びとが
ていねいに生きていた一日一日を

一瞬の大地の鳴動が

破壊つくしたあの夜の津波の怖ろしさ

連れ去られた家族たち

かなしいその光景に失意して

未来を拒んだりしないでください

あなたの一昨日一日を

このままでは終わらせないでください

はるかな海の



月夜の眠りに還^{かえ}っていった人びとのために

最初の人が板切れとともにこの磯に立ち

銀色の魚を釣り

野菜や穀物を育て

ひと組の男女が結ばれ

父となり母となり

ながい寒さから幼な子をまもり

働くことをいとわずに築いてきた村や町

くらしの糧^{かて}をわけあってきた

海辺の家族の

その歳月を置き捨てずにいてください

生き残った人びとの

心に移り住んでいく魂たちの祈り

無数の人びとの温かな声援

憶えていてくださいあなたも

※時空翔横の石碑に刻まれています。



写真は、`時空翔。 さざ波の上にハート形の心、くぼんだ部分の内側には、津波が刻まれています。



奥尻島あおなえ青苗地域は、北海道南西沖地震で被害が甚大だった

ところで。右の写真は、津波の跡。復興を考える会は、住民の要求調査にとりくみ、その要望をうけて高台への移住、市街地の土あげ（当初計画では海岸が見えないとの不安から下げる）、漁港作業時での避難場（写真上）設置が実現しました。岬周辺は、津波館や記念碑、公園として位置づけました。奥尻島津波館は伝承機能として、町が直営しています。雲仙うんせん普賢岳ふけんたけの復興などに学び、応急仮設住宅約三〇〇戸の早期設置、基幹道路の開通、住民要求調査が行われました。

二〇〇五年に開催された福島大学での社会福祉研究交流集会では、災害と福祉をテーマに特別分科会を設けました。コーディネーターの鍋谷州春なべやうはる主任研究員（二〇一二年死去）は、震災当時、道南勤労者医療協会の専務理事として支援の先頭に立っていました。



【ひろばトーク】

福島を、自分の目で見て考えた

赤瀬杏奈、中村真里七、鳥井杏弥、山下愛加 6

福祉のひろば

2015年2月号

●特集● 福祉の現場で長年働きつづけられた理由

社会福祉に陽の目をあてるたたかい	長谷 秀雄	10
次の世代に希望をつなぐ	久保 三夫	12
自分を成長させてくれた児童養護の子どもたち	武藤 素明	14
「どんなに障害が重くても受け止める」をつらぬく	萩原 政行	16
女性が働くことを支え、自身も働きつづける	山吹 京子	18
けっきょくこの仕事が好きなんです	井上 尚美	20
納得できるまでやめない	西沢 富子	22
諸先輩の経験から学ぶこと	多久和令一	24
年始広告		25

●トピックス●

何をねらう 保育・介護の資格要件緩和		28
現場とともに福祉労働者をそだてる福祉系短期大学の意義と役割	鴻上 圭太	36
制度をつづけるためだけでなく 生活をつづけるための改定を	正森 克也	42
災害と福祉——北海道南西沖地震の奥尻島から	下野 祇園	48
第21回社会福祉研究交流集会in埼玉 第1回準備会が開催されました		52

●連載●

フォーラム	上野さと子	56
消費税10%増税先送り どうなる「子ども・子育て支援新制度」		
あれから3年……釜石・東日本大震災を記録する会代表		
十一、遺族の想い、悲しみ、悔しさ	前川 慧一	58
相談室の窓から S子さんの手記(2)	青木 道忠	60
楽しく、学びながら、願いを表現する青年当事者の会	織原 太郎	62
育つ風景 劇ごっこの子どものこだわり	清水 玲子	64
いっぽいっぽの挑戦(23)	繁澤 多美	66
映画案内 『彼岸花』	吉村 英夫	68
現代の貧困を訪ねて 貧困と生活保護についての授業	生田 武志	70
なにわ銭湯見聞録(22) 健康! ランニング銭湯	ラッキー植松	72
いただきます!	南海香里のさと	74
ええダシでます! 野菜たっぷり野菜みそラーメン		
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け! 男やもめ	川口モトコ	77

●表紙の絵● 神門やす子



●カット● 川本 浩

みんなのポスト 54 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● 南西沖地震語り部 制野征夫さん

福島を、自分の目で見て考えた

あかせ 赤瀬 さん、
とりい 鳥井 さん

あんな 杏奈 さん、
あみさ 杏弥 さん

なかもら まり な 中村真里 さん
やました あいか 山下愛加 さん

こんにちは。私たちは神戸女学院大学・石川康宏ゼミナールの三年生です。一一名のゼミ生を代表して、私たち四人が発言します。

私たちのゼミは「原発・エネルギー問題」を、経済学の視点から学んでいます。私たちがこのゼミに入ろうと思っただけは、二〇一一年の東日本大震災でした。東京電力福島第一原発が事故を起こし、環境や、周辺住民の生活や、日本社会の全体に大きな被害をおよぼしました。しかし、関西では被災地のニュースを目にすることがずいぶん少なくなっています。「現実はいったいどうなっているのだろう。被災地の現状を自分の目で見て、考えたい。日本社会の現状を知りたい」と思ったのでした。

想像以上だった復興の遅れ

二〇一四年九月に、ゼミのみんなと福島県を訪ねました。三泊四日で、川内村、浪江町、南相馬市、福島市をまわり、福島大学の先生、町や県の職員さん、商工会議所の方、畜産業・漁業・農業などにたずさわる方や高校の先生から、被災や復興のリアルな実状を聞かせていただきました。

そのお話を聞いて、復興はまだまだ進んでいない、と強く感じさせられました。事前
に教室で学び、考えていた以上に、被災地での生活は深刻なものでした。放射能汚染のため、村のすばらしい観光資源が使えません。殺処分は出て、家畜を簡単に殺
せません。長年かけてつくった豊かな土が使えません。ある漁師さんは「海のがれき処
理が親の仕事だと、子どもに作文で書かれてしまった」と嘆いておられました。また、
学校に通う子どもたちの学力や育ちの環境にも、深刻な影響がおよんでいました。



石川ゼミナールの先輩たちが出版してきた本
『女子大生のゲンバツ勉強会』（新日本出版社）
『女子大生 原発被災地ふくしまを行く』（かもがわ出版）

時間がとまった浪江町と放射能汚染のこわさ

私たちの中には、震災一か月後に、岩手県や福島県の沿岸部の被災地を見た者もいます。そこには津波ですべてを流された、こわいほどに殺風景な景色がありました。それと変わらぬ光景が、浪江町には三年半後のいままも残されているのです。津波で転がされたクルマ、陸の上に打ち上げられた漁船、がれきの山、津波の瞬間に止まった電気時計のある小学校。これが震災から三年半後のこの町に残る景色です。

復興が遅れた一番の理由は、放射能による汚染です。原発事故のこわさを、あらためて教えられた思いがしました。

復興の努力を励ましたい

たくさんの方のつらさや苦しみがある一方で、復興に向けて努力している人たちの姿も印象的でした。傷ついた人々の苦勞に寄り添いながら、あわせて、復興への努力を励ますことも大切だと思いました。

こうした思いをもって帰ってからは、大きなことはできなくても、バイト仲間に、友人に、家族に、見たこと、感じたことを伝えてきました。

二〇一五年は被爆七〇年の年でもあります。私たちは、いま「原発と核兵器」をテーマに本をつくっています。一人でも多くの方に福島の今を知ってもらえるように、ぜひ良い本にしたいと思っています。

特集

福祉の現場で長年働きつづけられた

理由

——^{しんかや}申佳弥(28)が聞いてきました！

今号の特集では、「なぜ先輩たちは福祉の現場で働きつづけられたのか？」に注目しました。どんな思いで福祉現場に入職し、どこにやりがいを感じていたのか、やめたいと思ったことはあるのか、長年働きつづけて良かったと思うことはあるか…… 何十年も福祉現場で働いてきた先輩たちのおはなしが、若手職員が「福祉の仕事」を考えるときの、なにかヒントになればと思いました。

本誌二〇一四年四月号特集「あなたの近未来はここにある！」——社会福祉現場で五年間働きつづける先輩たちからの発信」をスタートに、総合社会福祉研究所では、「社会福祉現場で働く二〇代職員の調査研究」をすすめています。五〇〇件ちかい回答をいただいたアンケート調査では、質問事項への回答のみならず、自由記述の記入がととても多く、そこには若手職員の切実な思いが描かれていました（調査の中間報告は本紙四月号で予定）。

多かったのは、「福祉の仕事自体はとて専門性が高く、やりがいを感じているけれど、働きつづけられる自信がない」というものです。理由は、低い賃金、労働環境、将来の見通しがもてないなど、いろいろあると思います。正直、先輩たちのおはなしをうかがうまでは、「時代」がちがうのだから、ヒントといってもむずかしいかなと思っ